



きじむんのとぅ〜ちゅいむにい〜 古文書入門編

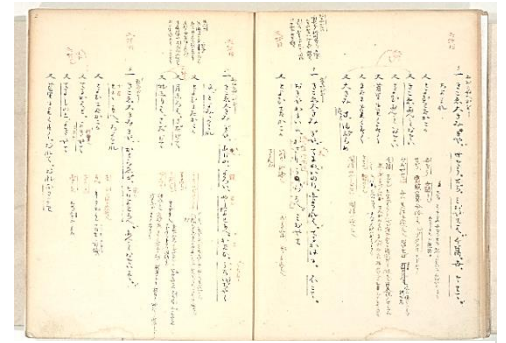
第4回 写本・版本・活字本

キーワード：琉球版、^{たいじょうかんのうへんたいい}『太上感応篇大意』、^{だな そうけい}田名宗経・^{そうそう}宗相

いや〜暑いね！夏季休業までもう少し。頑張って駆け抜けてよ〜！！さて今回はひとつの書物を共有するために昔のひとはどうしていたかというお話。今ならなにかとデジタル化されていて増刷も簡単かもしれないけれど……

① 手で書き写す

まずはすべて手で書き写すという方法があります。こうしてできた本を写本しゃほんといいます。例えば琉球最古の歌謡集『おもろさうし』は1710年に再編された際に2部作成され、尚家と安仁屋家に伝えられました。沖縄学の先達たちはこれを写し、写したものをさらに写すなどして研究をしてきました。右は安仁屋家本からの筆写本を1895年に田島利三郎たじまり さぶろう（当時沖縄県尋常中学校教諭）が書き写したものです。のちに田島はこの資料を伊波普猷いは ふゆうに譲り、現在当館の伊波普猷文庫に所蔵されています。



伊波普猷文庫 046(1) 『おもろさうし[1]』 10 頁

② 版木を彫って刷る

あるいは版画のように原稿を版木に彫りつけて刷り上げるという方法もありました。こうしてできた本を版本ほんぽんといい、とくに琉球で版木を彫って印刷・発行されたものを「琉球版りゅうきゅうばん」といいます。たとえば宮良殿内文庫所蔵の『太上感応篇大意』^{たいじょうかんのうへんたいい}。本書は中国で最も代表的な勸善書である『太上感応篇』を1858年に琉球の田名宗経・宗相親子が刻字・刊行したものです。

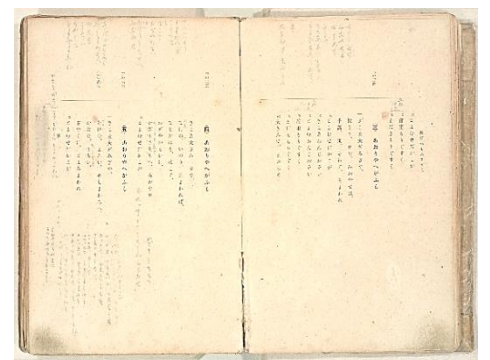


宮良殿内文庫 019 『太上感応篇大意』 3 頁

③ 活字を組み合わせて印刷する

「沖縄県」が設置されて間もない1879年末～1880年初頭、沖縄に活版印刷の技術が導入されました。活版印刷とは木や金属でできた活字を組み並べて版を作り、インクをつけて印刷する技法です。当時、漢文活字478,819個が県外から沖縄県へ輸送されたとのこと。

右は1925年に伊波普猷が活版印刷で刊行した『校訂おもろさうし』です。同書は600部発行され、従来、数冊の写本に依拠するよりよくなかった『おもろさうし』研究を、大きく進展させることになりました。



伊波普猷文庫 047(1) 『校訂おもろさうし』 25 頁

この3冊はどれも当館のデジタルアーカイブから閲覧することができるから、見てみてね〜📄 (CY)

参考文献：糸洲安剛『沖縄印刷業発展史』、タイムス住宅新聞社、1995年。

『史料が語る琉球』、琉球大学附属図書館、2003年(📄琉球版についての紹介あり)

